

十月一日、羽田宗佑は死んだ。

見知らぬ不良に刺されて、病院で息を引き取つた。犯人はその場で捕まつたものの、何故殺されたかがいまだにわかつていない。わかつてることは、宗佑がもうどこにもないということだけだ。

田辺慎一は日記を閉じた。慎一にはこれ以上書く言葉が見つかなかつた。慎一の頭はたつた一つの事実に拒絶反応を起こすことしかできなかつた。親友の羽田宗佑がいない。もう話しかけてくれることはない。慎一は彼を失つた。この不条理を慎一は受け入れることはできなかつた。

体中がひどく重かつた。必要以上に同じ思考の堂々めぐりを繰り返すことで、全身が疲労していた。この日の夜に慎一ができることは、布団の中に体を投げ出すことだけだつた。明日、彼の葬儀が行われる。今、慎一に出来ることは明日に備えて寝ることだけだつた。

慎一の体が揺さぶられる。まぶたを開ける。すると、妹の雪子の愛くるしい瞳がこちらを覗き込んでいたのが分かつた。

「兄さん、遅刻しちやうよ」

いつも通りのやり方で妹に起こされたのだが、いつもの明るい声ではなかつた。いつもより冷酷に冴え渡つた頭は昨日の事が夢ではないことを明瞭に伝えてきた。

「今何時だ？」

「八時近い」

慎一は一瞬だけ驚愕した。しかし、目覚まし時計を見て、僕は冷静さを取り戻した。

「七時四十分。どう考へても八時近いとは言えないな」僕は目覚まし時計を指差しながら、たつた一人の妹にそう告げた。

「そうだけど、朝食ぐらいは食べなきや。起きないと食べ損なうよ」

「昨日もいつただろ。朝食はいらない。八時になつたら起こしに来いって」

「ご飯どころか、ゼリーひとつ、液体一滴ですら、喉を通す気分ではなかつた。だが、妹があまりにもしつこく朝食を食べろと言い続けるので、慎一はどうとう根負けした。

布団から体を起こすものの、気分が沈んでいるせいか体がとても重く感じられた。親友の死が質の悪い夢であつたならどんなにいいことだろう。ぼんやりとそう考えながら、僕は部屋を出た。

その後はすぐに階段をおり、居間へと向かつた。両親がすでに食卓を囲んでおり、いつも通りの光景ではあつた。ただし、普段と比べて明らかに口数が少なかつた。家族ぐるみで付き合いのあつた宗佑の死は間違ひなく、暗い影を落としていた。

「…慎一、少しいいだろうか」

口火を切ったのは父であった。

「…気持ちはわかる。…だが、あまり引きずりすぎるな」

表情が暗く陰っているのを慎一ははつきり見た。やり場のない悲しみが居間の空気を濁している。少なくとも、慎一にはそんな感じがした。

朝食を終えた後、田辺家は羽田の葬儀に参加した。あたりにはたくさんの参列者が来場しており、どことなく陰鬱な空気を慎一は感じ取っていた。天候は穏やかな晴れであるにもかかわらず葬儀会場の周辺は鬱屈な空間がとぐろを巻いていた。黒い背広を着た中年の男性。真っ黒な着物を着た老女。黒いブレザーを着た少女。学ランの青年。誰も彼もが真っ黒に染まっている。慎一には周りの空間が白黒の様に見えた。その白黒の空間の中では嗚咽と沈黙があつた。会場に着く頃には誰一人口を開くものはなく、ただ嗚咽と黒しか残らなかつた。

葬儀を終えて、家に着いたときにはすでに正午となっていた。両親は共に沈黙したまま虚ろになつていた。慎一は雪子がいつの間にか泣きじやくつている様子をただただ、ぼんやりと見ていた。そこでようやく、慎一は涙を流した。

葬儀のことは何も覚えていなかつた。別れを悔やむ言葉や念佛やら様々な言葉が行き交つた空間に身を置いているせいかコメディ番組のワンシーンを見ているような感覚にみまわれた。あまりにも現実離れしているような感覚であつた。心の奥底では皆があまりにも真剣な様子なので、これは何かの冗談だよなとか、絶対何かのサプライズかなにかだよなとか、そういう感覚で葬儀を見つめていた。

「僕の親友がいなくなるはずがない」

慎一はそう呟いた。「いなくなるわけない」という言葉をただうわ言のようにくり返していた。しかし、雪子が泣いているのを見て、いつの間にか言葉がたどたどしくなつた慎一は雪子の肩を抱きかかえながら、嗚咽を漏らしていた。

ひとしきり泣いた後、二人はずつと押し黙つていた。

宗佑が死んだ日から十日も過ぎた後も、慎一はずつと虚ろに過ごす事しか出来なかつた。幸い、宗佑の遺族や家族の支えによつてなんとか学校には行ける程度には回復しつつある。しかし、慎一はどこか人の手の届かないところに意識がとんでいる様子であつた。

高校での授業はそつなくこなしているものの、クラスメイトとの会話の輪に参加していない。今は一人になりたい。慎一は教室にいる間そう思つていた。

だが、やや軽薄で陽気な奴がややにやけた口調で話しかけてきた。

「よお、今回はずいぶんと氣の毒だつたな」

「あんたか、長田。僕は授業の準備で忙しい。エロ話なら後にしてほしいね」

「そう言うなよ、最近はつれないじゃあないか」

『最近は』と言うのは嘘だった。この長田という男は会うたび会うたびエロ話ばかりしてくる極めてうつとおしい人物であった。そのためか、慎一は内心でこの男を『色ボケスマイル』と名付けていた。その一方で、この男はなぜか女の子に嫌われず、むしろ好かれていた。この事は慎一がこの学校で見聞きした事の中でも最大級のミステリーであった。

「まあいい、何の用だ」

慎一はややぶっきらぼうにそう問いかけた。また猥談に引きずり込まれるのだろうかと慎一は一瞬そう考えた。だが、今回は違った。長田はいつものにやにや笑いをやめてから神妙な表情で言つた。

「お前の妹の様子、変じやないか？」

いつになく真面目な様子を見て、慎一はただ事ではないことを悟っていた。だがその言葉の意図は分からなかつた。

「どういう意味だ？」

「俺にもよくわからないが、おびえているとも思い詰めていると噂になつていて。宗佑が死んでからどこか様子がおかしい」

断片的な情報ではあるが、彼女の身に何かが起つていて慎一には分かつた。何かしら相談に乗れないものかと思い、慎一は顔をしかめそうになつた。しかし、長田の前であるので平然を装う事にした。

「分かつた。じゃあな」

「まあ待てよ。まだ話があるぜ」

「何だよ」

「4組で巨乳の…」

そこまで言いかけところで、慎一は長田を無視して授業の準備を始めた。妹の話は気になる。ただし、長田の猥談はどうでも良かつた。

慎一はその日の放課後の部活動とカウンセリングを早めに終えて家に帰ることにした。妹の事が気になるからだ。忌々しい事件の事もあってか顧問の先生の理解もあり、七時半を過ぎた頃には帰り支度が行うことができた。

家に着くと、夜中のせいか玄関口は暗かつた。だが、電気をつける事で視界を確保した。薄暗い今に着いてから、ようやく壁の時計が見えるようになつた。

時刻は七時半であつた。

柱時計の音だけがこつこつとあたりに響いていた。どうやら、母も父もどこかへ出かけているようだ。居間のテーブルに書き置きがあることに慎一は気がついた。

「わたしのせいで宗佑君は死にました。私だけがのうのうと生きてごめんなさい。さようなら。雪子より」と書かれていた。

全身の血が凍えるような最悪の未来を感じた慎一は家を飛び出し半狂乱になりながら、雪子の姿を探しまわつた。雪子のいる中学校。行きつけのスーパー。ありとあらゆる場所

を探しまわった。しかし、いくら探しても雪子の姿を見つけることはできず、とうとう、両親と警察に連絡を入れた。

警察の人からの事情聴取や質問がずっと続いて慎一は全身が鉛になつたような感覚に見舞われていた。父や母もほとんど興奮状態のまま家に帰つてきていた。母はパニックになりかけており、警察官二人の静止を今にも振り切つてしまいそうな状態であった。父は冷静そうに振る舞つて入るが、額から大量の汗が吹き出している様子が見て取れた。

やがて、警察官の一人が青ざめた顔で居間に入つてきた。刑事さんになにやら小声で話しかけた後に、持ち場に戻つた。

「雪子は無事なの？ そ�だと言つて！」

母は刑事さんにつかみかかるようにそう言つた。

「みなさん、覚悟して聞いて下さい…」

刑事さんはとても重い表情をしながらそう言い始めた

母は大声で同じ言葉をくり返した。だが、刑事さんは淡々と非情な事実を告げた。

「田辺雪子さんは、遺体の状態で発見されました。お悔やみを申し上げます」

母は一瞬、凍り付いたように静止した。あまりにも残酷な現実を前に呆然としていた。

慎一は父が嗚咽を漏らす様子に気を取られた。

その瞬間、母は怪鳥か獣のような悲鳴をあげながら辺り一面を引っ搔き始めた。慎一は母に腕を引っ搔かれてその場で頭を床にうつた。父は泣きながら、「やめろやめろ」といながら警察官たちと狂乱する母を止めていた。慎一は刑事さんに体を揺さぶられた状態で意識を失つた。

「田辺先輩、起きてください。いつまで寝ているんすか」

慎一は車の中で相方の木下に体を揺さぶられて目を覚ました。

「また、あの長い夢だった」

慎一はそう苦々しく吐き捨てた。

「疲れてるつすね。この仕事をささつと終えて一杯やりましょや。仕事ばかりじや、疲れちまいまっせ」

この場合の「仕事」は、表社会の仕事ではなく、いわば非合法な活動であつた。

銃器の密輸、薬物の運搬などいわゆる「運び屋稼業」である。十年前の事件のせいで精神疾患（いわゆる PDSD）を患つた母を養うため、バイトしながら、そのような仕事を引き受けているようになつていて。高卒の就職先はないので、一週間生きるための金に困つていて。当然、大学には行つていない。父は過労による事故で命を落としていた。会社側が田辺家を裏切り、事故を隠蔽しているからだ。事故の賠償は未だにされていない。

そのこともあって、慎一は反社会的な稼業に手を染めるようになつた。だがその一方で、独自に事件を調べる事だけは忘れなかつた。すべては眞実と復讐のためであつた。なぜ、

雪子が死ななければならなかつたか。なぜ、宗佑が殺されたのか。慎一は本当のことを知りたかった。さもなければ、死んだ父や傷ついた母が報われない。少なくとも慎一はそう考えていた。その為には、生きて成すべきことを成す為にどんなことでもしなければならなかつた。

「そりいえば、そろそろ時間だな今回の俺たちの仕事内容は、今回もシャブだな。今はやりの『ハーブ』ってやつか」

「そそ、ちなみに今回も柴田のおつさんからの依頼つすね。『直営店』まで運んでほしいだとさ」

「襲撃の可能性は？ 相場よりやや報酬が割高になつていてるが？」

「カラーギヤングに狙われる可能性があるらしいね。若い連中は制御が利かないから厄介だね」

「ち、だからチヤカよこしたのか」

「そうゆうことつす。まあ、田辺先輩と一緒に問題はないつすけどね」

「逃げんなよ？」

「逃げたら、オレ殺すんでしょ？」

あつけらかんと答える木下に「当たり前だ」と慎一は無愛想に言葉を吐き捨てた。平時はいつもこんな調子だが、非常時には徹底的に残忍になれる男であつた。

「まあ、そんなこともあろうかと思つて持つてきたつす。手榴弾」

慎一は思わず苦笑した。こういう準備には、木下はとても手慣れている。

「店ごと吹つ飛ばす氣か。お前」

「店が襲われる可能性は十分あるつす。だとしたら店の前が敵で埋まるか、全滅して占拠される可能性すら考えられるつす。いずれにせよこれは必要つすよ。先輩もどうですか」「…無事だといいな。その店」

相方のいかれ具合に呆れながらそう言つた後、慎一は車のエンジンキーに手をかけた。今休憩している場所から目的地までそれほど距離はなく車でいけば二十分も掛からなかつた。

『直営店』は路地の入り組んだ場所に立地しており、車での移動はかなり難儀する場所だつた。それだけに攻めにくい場所であつた。そして、隠れ蓑に適した場所で、違法な取引を行うには最も向いていた場所でもあつた。

近場の駐車場に車を止めた後は、徒歩で『直営店』まで向かうことにした。

だが、そのような建物は住宅と区別がつきにくいので、『商売』にもつてこいであつた。木下はギターケースを片手に車の外へと出た。その中身は当然ギターではなかつた。慎一は拳銃を懷に忍ばせた後、トランクから依頼品のカバンを運び出した。

『直営店』は一見すると安っぽい一軒家のようにしか見えなかつた。だが、襲撃計画の情報があるせいか強面の男たちが何人かあたりに張り込んでいる為、ここが平穏な場所でないことは一人には分かつた。慎一は扉の前でノックをした後、インターほん越しに合言

葉を言つた。

「入りな」という言葉とともに扉が開く。二人は構成員の男達によつてオーナーのもと  
に案内された。廊下を通り抜け居間へと入つていくと柴田のおじさんの甥である。この場  
所が『直営店』と呼ばれるゆえんである。

「あんたらが日本一凶悪な運び屋コンビか。噂には聞いているよ。私がここのおーナー<sup>1</sup>  
にあたる柴田達也だ。東京からはるばる来てくれてありがとうございます」

「いえ、お気遣いなく。俺たちは仕事で来ただけですから。それより、依頼のブツをき  
ちんと持つてきました」

そう言つて、慎一は依頼品のカバンを机の上で開けてみせた。

「中身は確認できたよ。約束通り、報酬も渡しておこう」

慎一は報酬の額をその場で確認すると、達也に深々と一礼をした。

「それでは、私たちは——」

これで失礼いたしますと言う前に屋外から破裂音が何度も響き渡つた。その後に怒号と  
ともに激しい地響きのような振動が室内にまで伝わってきた。木下と慎一にとつてその破  
裂音はとても聞き覚えのある音であつた。

銃声。運び屋を始めてから何度も聞いている音であつた。

「きやがつた」

増長天のような形相で達也はそう呟いた。

「あーあ、いつもの展開ですね」

心底喜んでいるような表情で木下は慎一に話しかけた。

「どうせこうなると思ったよ。達也さんを車まで避難させる。裏口の位置を確認してお  
いてよかつた」

玄関口で構成員が足止めをしている間に避難する必要がある。慎一たちは裏口から達也  
さんを避難誘導した。

「出てきたぞ。殺せ」

だが裏口を出た後、六人の白い服装の若者たちがこつちに突撃してきた。五人は主に  
金属バットやジャックナイフ、鉄パイプで武装していた。残りの一人は拳銃を持っていた。

慎一と木下そしてその場に居合わせた構成員二名で一斉に持つていた拳銃を取り出し、  
その引き金を引いた。バケツをたたいたような破裂音が十回以上その場に響き渡り、そ  
の場にいた暴徒の群れを無理矢理永眠させてしまった。バットやナイフで武装した方は、蛙  
を押しつぶしたような悲鳴をあげてその場に三人、うつぶせに倒れ込んだ。残りの二人は  
出血とともに額に穴を開けられ、間抜けな表情をした後、虚空をあおぐようにしてそのま  
ま倒れた。拳銃を持つた白パークー男は構成員の一人の肩を射抜く大健闘を果たしたが、  
木下と慎一の二人の凶弾によつて、すぐに短いガ行音の悲鳴をあげる壊れた人形に変えら  
れた。

「残念、また来世」

無邪気に、微笑みながら木下はその場を後にした。その後を慎一達が追いかけた。

駐車場付近には、幸いにも白ギヤングは見かけなかつた。あたりに警戒をしつつ、助手

席に達也を乗せて全員が車に乗り込んだ。

運転席に乗り込んだ慎一はエンジンキー何回もひねり、車を始動させた。

「近くに事務所がある。そこまで避難しろ」

達也はそう慎一に怒鳴りつけた。だが武装した白装束の若者が道を塞いでしまつた。五

人と言うレベルではなく三十人は確実にその場にいる事が車内の人間には分かつた。

「あ、これは…」

木下は皮肉な笑みを浮かべた。

「道が！道が！どうするんだ！？」

達也は半狂乱になつて荒れ狂つた。

「頭を下げて下さい。出発します」

慎一は事務作業をするかのように冷淡にこういった。その瞬間、慎一はアクセルを滑らかに踏み、集団のいる方向へまつすぐ突っ込んでいった。達也と二人の仲間はひとつと短い悲鳴をあげて頭を下げた。木下だけは優雅に座つて運転の様子を眺めていた。

車は何発もの9ミリパラベラム弾を受けたが決して止まることはなかつた。車はギャングたちの群れに突っ込み不運なギヤングを次々と処刑して回つた。タイヤに引き潰される者、10メートル跳ね飛ばされて壁に激突する者、上空に跳ね飛ばされて墜落死する者でいっぱいになつた。地獄絵図がそこにはあつた。勘のいい何人かの者は車が来た瞬間に逃げ出したため無事だつたが、そうでない者たちは思わぬ反撃に右往左往するばかりであつた。

そして、血と肉とわずかに幸運な者たちだけが、そこに残された。

事務所で車を洗車した後、一行は高速道路で東京の本部に向かつていた

「いまのは何だつたのだ」

達也は呆然とした様子でそう言つた。

「車にちよつとした改造が施してあつて、防弾仕様にしてあるのですよ」

木下が飄々とした様子でそう告げた。

「そ、そういうことじやない。な、何もあそこまでやる必要は…」

「仕方ない事だつたのですよ」慎一は冷淡にそう言つた。

「戦場に足を踏み入れた以上、その中にいる人は生き残る為に最善を尽くさなければならぬ。それが出来ない者は死ぬ。私たちはその為に行動をしたまでです。どんなに奇麗事を並べても戦場で死ねばそれは自己責任であり敗北です。我々が足搔いた結果敵が死んだとしてもすべて敵の自己責任ですよ。なに、気にする必要はありません。私たちはまだ生きているのですから、もつと堂々とすべきですよ。それより後方の様子はどうですか」

「…後ろにいるのは明らかにカタギの車だ。追つ手はいない」

その返事を聞くや否や、慎一は満足げな笑みを浮かべた。

柴田を組織の本部に護送した日の晩に、慎一は木下の家で気怠く酒を飲みかわしていた。

「あーあ、結局使えなかつたつす。手榴弾」

木下はひどく落ち込んだ様子でぼやいた。

「使い慣れない『とつておき』よりも、使い慣れた『相棒』の方が役に立つということさ。まあ残念だつたな」

慎一は人間の方の『相棒』にそう言つて、拳銃を懐から取り出した。追加の報酬としてもらった拳銃をふてくされている木下に見せびらかした後、机の上にそれを置き。おもむろに整備を始めた。

「あの距離じや手榴弾は使えなかつたすけど、絶対いつか役に立ちますよ?」

「まあ、また今度つてことさ」

「まあそそのかわり、ギヤングどもを派手にひき逃げしたことでよしとしましよう」

そう言つて、缶ビールをがぶ飲みする木下を尻目に拳銃の整備を完了させ、木下の金庫にしまつた。そして、玄関口へと歩を進めた。

「ん? 飲まないんすか」

「また今度な。母の様子を見に行く」

「…つれないっすけど、先輩のそうゆうところ嫌いじやないっす。仕事はいつにしますか?」

「当分先でいい。例の件で動きがあつた」

「妹と昔のダチの事件すか?」

「そうだ、宗佑の恋人だつた人が話に応じてくれるらしい」

「…弔い合戦の時には呼んで下さいよ?」

不安そうにする木下に「当たり前だ」と慎一は素っ気なく言つた。

次の日の昼間、新宿南口は相も変わらず人でいっぱいになつていた。しかも、目的の人と会うのは、おそらく十年ぶりのことである。そのため、それらしき人物を目視で探すのは、とてもではないが困難であった。慎一は携帯電話を取り出した。

「今どのあたりにいる?」

「改札のあたりよ。柱のところにいるわ」

慎一はスマートフォンを持った女性の姿を見つけた。ジーンズと白と赤を基調としたシヤツを着用した活発な今時の女の子であり、十年前の頃とはまるで別人であった。しかし、その横顔には見覚えがあった。

「ああ、見つけた。あの頃とはずいぶんと見違えるようになつたな」「どう見違えたの?」

そう言つて電話の主はふふつといたずらっぽく笑つた。

「すべてだ」そう言つて慎一はその人物のもとへと歩み寄つた。

「あなたこそ」そう言つて、梶原絵里は一瞬仰天した素振りを見せたが、しばらくして元の無邪気に微笑みに戻つた。

「ずいぶん変わったわね。昔はもつとこう大人しそうだったような気がするけど時変化というものは恐ろしいものだな」

慎一は自嘲気味にそう言つた。その言葉を聞くと絵里の方も表情を曇らせた。

「…そうね。だけど変わらないものもある。自分の中に眠る感情とかね」

そのもの哀しげな表情だけは十年前と変わることはなかつた。慎一は少なくともそう信じていた。

「あなたのその十年前と変わらない表情以外は怪しいものさ。この世界は残酷なものが多くすぎる。正直、確かなものなんて、信じられないよ」

「…お互いそんなことばかりね」

目をつむりながら、声だけは淡々と呟いた。

慎一はこれまでの事を思い返してみた。失いたくないもの、壊されたくないものばかりが壊されていく。そんなことばかりを慎一は味わつてきた。なぜ、そうなつてしまつたのか。その真実を知らないうちには死んでも死に切れないと慎一は考えた。

「そうだな。ところで、場所を変えないか?こんな騒がしいところでは落ち着かないだろ?それに…鬱屈した気分になる。気分を…変えたい」

その提案に目の前の女の子はちいさく、しかし、はつきりとうなずいた。

慎一たちはしばらく東京を当てもなく歩き回つた後、小さな喫茶店で落ち着いた。店に着くまでは、終始無言であった。席に着いてもしばらくは変わらなかつたが、次第にぎこちなくはあるが、会話をするようになつた。先に口を開いたのは絵里であつた。ファッショングのこと、大学生だった頃の生活。友達のこと。十年間の間にどう生きてきたか、ありとあらゆることがらを少しづつ語りはじめた。

はじめのうちでこそ、慎一は乗り気ではなかつたが、友達の話題あたりから次第に質問を返すようになつた。

彼女はこの十年間、光を浴びながら、影を抱えながら生きてきたようである。まるですべてが嘘で塗り固められているような奇妙な領域に身を置いていた事が慎一には言葉の端々から感じ取れていた。

「わたしはね、宗佑君が死んだ日から、ずっと空っぽだつたの。宗佑君や雪子ちゃんが死んでから、何かがおかしくなつちやつた。雪子ちゃんの葬式の後、長田さんにお会つたわ」

「長田か、ここでその名前を聞くとはな」「知り合いなの?」

「中学の頃から高校まで同級生だつた。あんたこそ知り合いなのか?」

「そ、とっても陽気で背の高くて面白い人だつた。だけど…」

そこまで言うと、絵里は黙り込んでしまった。

「だけどなんだ？」

「なんか、嫌だつた。話していることは確かに面白いけど、あの人 자체は享楽的で奇麗な嘘で塗り固めているような人だつた。いつもにこやかだつたのは本当だよ。でも、時々何かを嘲笑しているようにも見えたの」

「俺は、あいつが苦手だつた。話しかけてくるたびに猥談ばかりしてくるから。俺は心中であいつのことを『色ボケスマイル』と呼んでいた」

絵里は『色ボケスマイル』の下りで大いに吹き出した。

「なんだよ、俺の顔になんかついていたか？」

「くく、ちがうちがう、『色ボケスマイル』てのが唐突にきたから、ふふ」

絵里は笑いをこらえている。その様子を見て、慎一は軽く苦笑いをした。

「でも、なんか納得した氣がする。あの人、なんか本心隠しているよね」

「ああ、中学の頃からいつもそうだ。あいつはいつも遠くから嘲笑しているようなイメージしかない」

「私は変に優しい人だつたイメージかな。今の遊び仲間とか。男友達とか全部、長田さんの知り合い」

「そうか、どんな人たちだ？」

「……不気味だつた。まるで自分が長田さんのヒロインみたいに扱われている。みんなノリが良くて楽しいけど、なんかみんなどこか演技をしているような感じだつた」

「そんな奴だけじゃないだろ？昔からの友達が一人ぐらいはいなかつたか？」

「…なぜか、みんな怖がつて離れていつちやつた。あの日からずつと」

慎一は確信した。絵里が話していることが、今日話される本題と関係あることにうつすらと気づき始めた。

「…そろそろ本題に入るべきだな、雪子と宗佑は何故死んだ？」

「それはわからない。けれど、この事件は長田さんと関係していると思う。たぶんこれは憶測だけど、貴方の父が死んだのも、宗佑君が死んだのも多分彼が関係している。あれから、あの貴方のお父様の事故を調べてみたのだけれど、事故にしては不自然すぎる。まるで会社ぐるみで貴方たちを不幸にしようとしている気にすら思えるわ」

絵里はあたりを気にしながら、ゆっくりとそう答えた。

十年前の十月一日に羽田宗佑は死んだ。隣町の薬物中毒の不良に刺し殺された。

その十日後の十月十一日に雪子が死んだ。廃ビルの十階から落ち、全身の骨が折れて死んだ。遺書には『私のせいでの宗佑が死んだ』と書かれていた。

その後、父は勤めていた会社に殺された、そして母は発狂し、私は確実に破滅への道を歩んでいる。そして、絵里は、恋人と友達を奪われ、人形のように愛でられている。これ

はすべて、長田の仕業なのだろうか。あまりにも規模がでかすぎる話に慎一は思わず混乱を隠せなかつた。

だが、彼女の話には一理あつた。父の事故は頭上から降つてきたたくさんの鉄骨によって押しつぶされて死んだことになつてゐる。しかし、父は死ぬ直前まで何人の同僚たちと仕事をしていたという。もしこれが本当なら、なぜ彼らが無事で父だけが死んだのか。まるで、父の頭上をピンポイントに鉄骨が降つてきることになる。

さらに、妹と親友の死も絵里の話を総合すると何者かの意図の元で引き起こされたかのように思える。これらはただの不幸だつたのだろうか。慎一はそう疑問に思つた。

いずれにせよ慎一たちにはある目標が生まれた。それは、長田が人殺しかどうかを確かめることだつた。

慎一たちは絵里の同級生で雪子の友達だつた人物に接触することにした。だがその前に、慎一は店を一度出て木下に電話した。

長田のことや絵里の話を可能な限り簡潔に話した。長田の名前を話すなり、木下の声はいつになく真剣になつた。

「そいつ、もしかしたら私が追つている奴の一人じやないか。ここでその名を聞くとはな」

「知つてゐるのか？」と聞き返すと殺氣のこもつた声で返答が帰つてきた。

「こないだの白ギヤングはおぼえてるか？あれのリーダーらしい。奴がメンバーになつてから勢力が急速に広がつてゐる。ヤクザのバッカアップもあつて警察もうかつに手を出せないらしい。やつと見つけたぞ。決行日はいつだ」

「まだだ。確証が得られるまでうかつに動くな」

「ちい、早くして下さいよ先輩。貴方といけば確実なんですから」

不機嫌そうな調子で木下は電話の回線を乱暴に切つた。

慎一が同級生に接触した結果は、真つ黒であつた。慎一たちが自分たちが調べ上げたこ

とや、自分たちが雪子と近しい人物であることを打ち明けるや否や、あつさりとすべてを告白した。彼女が雪子を見捨てたこと、長田に口止めされていたこと、そして長田がなぜ二人を殺したかを詳細に話してくれた。

まず、雪子の事だが、雪子は強姦されていた。そして、脅され、そのことを家族にすらはなせずに苦しんでいたのだ。そして、長田はそれに飽き足らず絵里にまで手を出そうとしていた。

どちらかが宗佑にばれて、その口封じの為に殺されたということだ。だが、その後、予想外のことが起きた。雪子の自殺である。自分の大切なおもちゃを失つた長田は、今度は自殺しない自分好みの女の子を作り上げようとした。その女こそが絵里だつた。

その話を聞くな否や、同級生の家の洗面台に胃の中のものをぶちまけた。

「うそよ。そんなの嘘よ、嘘に決まっている。みんなそんなことを黙っていたと言うの？」

人が、人が死んでいるよ！それも私の、わたしの友達が…。いやだ！いやだ！」

ひとしきり吐いた後、絵里は半狂乱になつて同級生を殴つた。同級生はただ仕方なかつたとうわ言のようにくり返しながら文字通り部屋の隅でおびえていた。

絵里は泣きわめき続けた。顔を涙でぐしやぐしにして、ただただ悽哭した。言葉は言葉にならず、ぐちやぐちやの言葉をわめきながら、奇麗だった顔を絶望で歪めた。慎一にその場で出来ることと言えば、彼女の背中をさすつてあげることだけだった。

三日後の午後11時、長田は絵里を待ち合わせていた。計画通り絵里は自分の事をただのいい人としか思っていないと考えている為か、長田は自分の計画がうまくいくことを確信して薄汚く微笑んでいた。遠くから絵里の姿が見える。

20メートル。

電灯の明かりに照らされて、可愛らしい娘がこつちに向かつている。

15メートル。

徐々に距離が縮まっていく。バランスの良い肉体に長田は釘付けになる。

10メートル

5メートル

「よ、待つてた」

その言葉をいい終わらないうちに、長田は取り押さえられ、彼の首元に注射器が突き刺さつた。

長田を確保する方法はとてもシンプルであった。まず、絵里をえさにして誘い込む。夜中に手頃な公園で待ち伏せ木下と慎一の二人で取り押さえる。麻酔薬を注射して眼らせる。後は近場の廃ビルに車で連れ込んで、真実を聞き出した後、好きな方法で抹消する。

最初こそ、わめきながら暴れたが、徐々にその抵抗は弱まり、ついには何の抵抗も、口から出る言葉も、まるで寝言のような支離滅裂なものに変化していった。慎一達は車で運ぶため彼の体を車内へと放り込んだ。

何時間かしてから、長田は、コンクリートの部屋の中にいた。体全体が縄で縛り付けられており、とても身動きが取れる状態ではなかつた。

「ひさしぶりだな。長田」

暗がりの方から、チェーンソーを持った木下と慎一が出てきた。チェーンソーの駆動音が部屋に響くたびに、長田が間抜けな悲鳴を上げた。

「おい、長田。俺の妹よくもレイプしてくれたなあ。しかもそのせいで俺の親友殺したつてか？どうなんだこの野郎お」

慎一の声 자체はそれほど大きくなかったが、殺気のこもつた口調と目つきでたちどころに長田をすぐみ上がらせた。長田はバラバラに何かを喋つてているが言つてている内容は要約

すると次のような内容となっていた。

「気の迷いで妹で遊んでしまった。二人を死なせるつもりはなかつた。何でもするから助けて」

慎一は長田にしばらく喋らせた後、「好きにしていいと」躊躇なく言つた。その瞬間、長田はどうとう本性を表した。

「ぐけけえ、おまえが正義漢ぶつて、敵討ちかい？ヤク壳つて、人撃つて、金もらつている社会のゴミが家族の復讐だつてか。けけけ、結局はてめえの都合のいいようにあばれていただけじやねえかあ。この世界はなあ。どんな奇麗事を並べてもよ、結局はみんな恵みに転じるんだぜ。アメリカや、アルカイダが正義の押し付け合いをするように、結局はみんな自分に都合の悪いものを他人に押し付けているんだぜ。だつたら楽しもうぜ、人も傷つけて、苦しめて楽しもうぜ。希望と言うものは他人に廃棄物を押し付けて成り立つもんだ。オメエも誰かをいじめればその気持ちがわかるぜええ。ぎやははははははは」

その言葉が最後に他人に話した意味のある言葉だった。その後は、木下によつて長田はバラバラのミンチに変えられた。

「終わりました。死体は処理しておきますので先にお帰りください」木下は虚ろな眼差しで慎一に言つた。彼はそれを聞いて死臭が立ちこめる部屋を一人出て行つた。

「何故、木下さんはそこまで、貴方に協力するんだろう」空港に向かう車内のなかで絵里は質問を投げかけた。

「あいつは過去にひどい虐待といじめにあつた事があるらしい。あいつにとつて、俺は唯一の家族とすら思える存在らしい。まあ、はじめのうちは爆発物や銃器にしか執着しない扱いにくい奴だつたけどな」

「ねえ、慎一私たちはこれからどこに引っ越すんだい？」

母が不安そうな表情でそう言つた。

「フィリピンにいる友達のところで働く。日本に俺たちの居場所はないからな」

半分嘘で、半分は本当であつた。木下とフィリピンで落ち合う予定であつた。日本にいるよりも貧しくなるだろうが、仕事の当てはあつた。どのみち、このまま日本にいたら、長田の仲間に狙われる時間の問題であつた。

「宗佑君はどつちの事を知つちやつたんだろう」

不意に絵里がそう呟いた。恋人と親友の家族どつちを助けようとしたのか。その真実は誰にも分からぬ。一人のエゴと十年の月日によって風化してしまつたからだ。

慎一は長田の言葉を思い出してふと独り言を言つた。

「死ぬこと生きることどつちが人間らしいのだろうか」

独り言は小さかつたが為に車内のラジオの音と混ざり合つてしまつた。だがそれでも聞こえる可能性はある。言つた後で、慎一は我に返つた。

しばらく無言がつづいた後、絵里は口を開いた。

「ねえ、田辺さん。私も一緒にについて言つていいかな？居場所のない人間は私だつて同じよ。このまま、日本にいたつて私は一人だから。お願ひ！」

正直なところ、認めていいか判断に迷つた。どこにいったとしても日本のときより不便な生活を強いられる事になる。そこで、慎一は慎重に考えた上でこう答えた。

「なら、一つだけ約束しろ、どこに言ったとしても君だけは人間らしい生き方をし続けると俺に誓つてくれ」

「その前に一つ聞いていい？」

「なんだ？」

「いつ頃から、自分のことを俺というようになつたの？」

「…いつからかは、忘れた。ただ、そのときはかつての俺は死んだ。なめられない為に俺は「僕」を殺し続けた。だがその一方でこうも思った。僕はこんな生き方でいいのか、こんな人生でいいのかつてずっと思つていた。俺は悪に殺されるのを避ける為に、自分が悪になつてしまつたのさ。だから、お前だけは俺みたいになるな。人は本来、人を食い物にして生きたら狂うように出来ているのさ。もし俺のそばにいるとしてもそのことだけはわすれないのでくれないか。約束してくれ」

絵里はこの言葉を聞いてから「分かった」とだけ言つた。

